力もち与太郎

ジャンル：民話

むかし　阿知須の引野というとっても、力もちでちょっとかわったおもしろい男がおりました。

ある年の、夏の終りごろです。大きい台風が　やってくる前ぶれがありました。どんより空はくもり、東風が吹いてきて、むし暑かったのです。となり村の、丸尾の港では、早くから灯台かおり、このあたりを通る船のよりどころになっておりました。台風が来ることがわかると、漁船は、みなこの港に入り、小舟はつながれて　沖に舟が逃げないように、こわれないようにされていました。いよいよ台風が、やってきそうです。りょう船（魚をとっている人が、個人でもっている小さい舟、ろでこぐ舟）持ちは、それぞれ自分の舟を　港の中の砂浜海岸に、つないでいます。こうしておかないと、舟が潮に流されたり、砂にうまってしまうのです。

さて、引野の力もち与太郎、大風が吹きそうなので、阿知頂の奥から、海へ走って出てみました。波止場まで二里（八キロ）ほどもある道を、スタコラサッサ　素足で走りました。行ってみると、五・六人が、一そうの舟をエンヤラサ、エンヤラサと、汗びっしょりになって浜にひっぱり上げていました。

「オーイ、おれが　引いて上げて　やろう。」

と言うが早いか、スタスタと、砂浜に下りた与太郎、一そうの舟を　たった一人でやすやすと、引て上げてしまいました。みんなは、びっくりぎょうてん、

「なんと力がつえのう、たまげたのう。」

与太郎は、こうして　みんながポカンと見ている前で　五、六そうも　引き上げたそうです。

「なんと、剛力じゃのう、すげえのう。」

みんな口をそろえていい、

「お礼に　なにしょうかのう。」

どいったら、何もいわずに、さっさと引野へ帰ってしまったと、いうことです。

また、この与太郎、こんなことも　あったそうです。

むかしは、玄米を白米にするのにダイガラというもので、ついていました。これは大へんな　仕事です。ところが与太郎は　ダイガラを、つかわずに、手のひらで　ペッタコペッタコ、ついていました。そして、自分の家だけでなく、となりの家、またそのとなりと、ついてまわって歩いていたので、村の人々は

「与太郎さん　おおきに　おおきに、すまんのう。」

と、大よろこびでした。

また、米三俵（一俵は六〇kg）を、やすやすと肩にもち上げ　阿知須から宇部方面まで　持っていったということもあるそうです。

さて、こんなに力の強い与太郎に、一人のにいさんがいました。このにいさんは、与太郎の、無口者にくらべて、とてもひらけていました。早くから　馬関（いまの下関）に出で、ある大きい商売屋で　奉公していました。

このにいさんが、ふと弟の与太郎のことを考え、友だちにたのんで、すもうとりにさせたらと想ったのです。そこで、その友だちと、立派な親方までつれて　帰ってきました。

「与太郎　おまえは、とっても力が強い、体もずっかい、それでのう、すもうとりになれ。ここにおいでの、親方に　すもうのとり方を習ってみい。すごい、すもうとりになるぞ。」

といったところ、与太郎は　何もいわずに隣の部屋にかけこみ、おんおん泣きながら、

「兄きのバカ　ぬるいこと　言うもんじゃ。」

といい、とうとう相手にならなかったそうです。

今でも　この力もち与太郎の墓が引野の地にあります。この前　お参りに行きましたところ、どなたがお参りになられたのか、造花の菊が一本そなえてありました。

出典　「阿知須ふるさと今昔　民話編」
平成十一年二月　発行
阿知須町教育委員会　発行・編集